

## 〔研究ノート〕

# 慈善の終焉またはソーシャル・ワークの育ちゆく頃

井 垣 章 二

### はじめに

社会福祉の発祥と展開の原点は貧民救済であった。民衆の困苦に対処しようとした救済活動は多く「慈善」(Charity)という名で呼ばれていた。一九世紀はさまざまな個人や団体による救済活動が隆盛した時代で、この私的慈善 (private charity) に対し、公的救済活動も公的慈善 (public charity) と呼ばれた。しかしこの慈善の時代、慈善というこのコトバは、それにかわるうとする次々と登場する新しいコトバによって次第に脅されることにもなった。まず、「博愛」(philanthropy) があり、そして「ソーシャル・サービス」、「ソーシャル・ウェルフェア」、「ソーシャル・ワーク」等が出現してくる。その世紀の終り近く、そして二〇世紀に入って「慈善」はますます色あせてゆき、慈善関係者の全国集会はそれまでの全国慈善矯正会議 (The National Conferen-

慈善の終焉またはソーシャル・ワークの育ちゆく頃

ce of Charities and Correction) が一九一七年、全国ソーシャルワーク会議 (The National Conference of Social Work) と改称されることによって終焉をむかえることになる。それ以前にも、「慈善」は一つの大事な星を落していた。その唯一といってよい代表的な専門雑誌『チャリティーズ・アンド・ザ・コモンス』(Charities and the Commons) は、一九〇九年『ザ・サーヴェイ』(The Survey) にその名をかえられてしまい、チャリティというコトバはそこでも重要な地位を失ってしまったからである。この小論は、この二つの事件を中心に、タムをめぐる「慈善」から「ソーシャル・ワーク」への変遷過程の考察を試みるものである。

### 1

こゝでの主題、全国慈善矯正会議のその創設は、一八七四年、

慈善の終焉またはソーシャル・ワークの育ちゆく頃

アメリカ社会科学協会 (American Social Science Association) の部会として始まり、その協会から独立して慈善関係者のみの会議をもった一八七九年とされている。ゆえにその発祥をたどれば、アメリカ社会科学協会とは何であったかということになるが、その発火点は州慈善委員会 (State Board of Charities) の形成にあった。これはマサチューセッツ州が一八六三年、初めて設置したもので、州内の施設など慈善関係諸活動の改善を目指し、その現状把握と点検・審議を行なう専門委員会であった。この中心メンバーであったサムエル・ハウ (Samuel Howe) とフランクリン・サンボーン (Franklin Sanborn) が、アメリカにも社会科学協会というものをつくることを呼びかけ、一八六五年十月五日、ボストンに三〇〇人を超える賛同者を集めたのが協会の始まりである。この社会科学協会とは、社会調査の先覚者、フレデリック・ルプレー (Frédéric Le Play) が一八五四年、フランスに設けたのが始まりで、これにならってイギリスでも一八五七年に社会科学促進協会 (The Association for the Promotion of Social Science) が設置され活動していた。会はかくしてアメリカにも結成されたが、しかしさまざまな分野で社会問題にかかわる実践家やアカデミックな研究者などを含む雑多な集合体で、その統合と運営にはさまざまな困難があった。とかくするうちに、六七年ニューヨーク州などを皮切りに、七三年までに十一の州に次々と州慈善委員会が設置されていった。かくしてその仲間を得た州慈善委員会は、二、三の州が集まってインフォーマルな会合

を開くなど交流も生じ、一八七四年、州慈善委員会のすべてがアメリカ社会科学協会の福祉部会 (social economy section) に集まることを呼びかけた。五つの州慈善委員会がそこに集まり、これをもって全国慈善矯正会議はスタートしたのである。以後社会科学協会の部会として開かれていた会議は、一八七九年、協会と全く別に会議をもち、全国慈善矯正会議は名実ともに確立されたのである。

一九〇二年、第二九回会議 (一八七四年が第一回とされている) においてティモスイ・ニコルソン (Timothy Nicholson) は会長アドレスにおいて、「全国慈善矯正会議——その過去と現在および今後の展望」と題して、かなり詳しくその成立発展過程について述べている。それによると七四年の集会の議事録は四八ページであったこと (今は五〇〇ページを超える)、一八七九年の第一回の独立会議はシカゴで開かれ、メンバーの範囲の拡大が訴えられ、刑務所マネージャーやそれにかかわるオフィッサーもメンバーに含めるとされ「慈善矯正会議」と称することが決定された。翌一八八〇年には一七州とカナダからの参加があり、一九〇一年、四七州のほかカナダ、キューバ、メキシコからの参加もあり、名実ともに全国会議となり、会期も当初二日間であったものが六日間となり、四セッションは一七セッションとなったとその躍進をたたえ、最後に、州慈善委員会が州施設の改善に取り組んでいる間に、私的慈善も目覚ましい発展をあげたとし、「事業の科学時代」(the scientific age of our work) の到来をアピール

して話を結んでいる。

2

一九〇四年、ジェフエリー・ブラケット (Jeffery R. Brackett) 会長挨拶は「ワーカー——目的と用意」で、ワーカー (The Worker) という語が題名そのものであったことに注目したい。

彼は、丁度二五年前 (一八七九年) に独立をかちとったこの大会が、当初一四六人の集いであつたものが今や一五〇〇人の大集会に発展し、われわれは「ワーカーの集い」(a gathering of Workers) である。私の課題とするところは「慈善、矯正および関連するソーシャル・ワーク諸形態」(charity, correction and kindred forms of social work) におけるワーカーの目的と用意についてであるとする。ここに「慈善」と「矯正」に並んで「ソーシャル・ワーク」であることに注目したい。会議はもともと州慈善委員会が中心であり、それゆえ慈善会議であるのだが、これに矯正が加えられた。ここに、会議の名称を慈善と矯正と並べたことは慈善をさまざまな慈善活動を意味するゆえに「チャリティーズ」とされているものの、その中に矯正を含めなかったのである。その他「関連するソーシャル・ワーク形態」といわしめたものは、慈善矯正に含み得ない他の領域におけるソーシャル・ワーク活動の発展を意味するものと考えられる。

たとえば慈善組織化運動に対して、新局面をひらくセツルメント運動が想起される。チャリティーといえば、慈善組織化運動がそ

慈善の終焉またはソーシャル・ワークの育ちゆく頃

れを形成し、その活動の拠点となった慈善組織協会 (COS と略す) のものであり、セツルメントはチャリティーではなくセツルメントであつたのに違いない。一八九八年以前のこの会議の『議事録』は参照できなかったが、レイビー (James Laby) の『歴史』によると、一八九六年、セツルメントのリーダーたちが初めてこの慈善矯正会議のプログラムに「現れ、セツルメントの立場とその活動について発表したとある。『社会科学の研究者たちは、現在わが国のいたるところでセツルメントが行なっているものを無視することはできない……これらレジデントによって集められた科学的情報は他のいかなるところでも決して得られないものである。……ヒューマニティに対する同胞的情熱と真理に対する科学的熱意のこの合体こそ、すべてのセツルメントの特質とするものである。』これはジェーン・アダムスの片腕といふべきハル・ハウスのレジデント、ジュリア・ラスロップ (Julia Rathrop) のその時の言葉である。

要するにこの会議では、分野にかかわらず「ワーカー」という一語で総括されたわけであるが、二年会議のニールソンの事業の科学化の強調を、ブラケット会長は、ワークがプロフェッションとなり得るためには、それが科学的知識と方法の適用によるプラクティスとなっているかということで一歩進めている。彼はいう。慈善そのものは科学的といえず、「訓練されたワーカー」(trained worker) によるものが科学的慈善 (scientific charity) である。そのためにワーカーは訓練されなければならず、近年の訓練

慈善の終焉またはソーシヤル・ワークの育ちゆく頃

・教育機関の創設に期待されるころであるが、またそれに関連して不足のない給料と適切な労働条件で雇われる道も開かれる必要がある。しかし訓練されたワーカーということに汲々とするあまり、パーソナル・チャリティーは不要だということではない。自からの意志で、代償を求めずこの仕事に専心する人があつてよいし、またなければならぬ。それこそ真の慈善とソーシヤル・サービスの最大の給源である。そうした人びとの活動をより有効ならしめるために、そのリーダーとなる訓練されたワーカーの増強が必要なのである。

3

翌五年、サムエル・スミス (Samuel G. Smith) 会長は、この会議が全博愛 (every form of Philanthropy) の代表者を含み、「全国ソーシヤル・ワーカーの会議」(National Conference of Social Workers) と呼び得るまでに拡大され豊かにされてきたとアピールし、この多様な現業分野が共通な基盤によって結ばれるべきこと、それは一つにはテクニカル知識であり、もう一つは理論的目的であるとして、「ソーシヤル・ワーカー」という名で呼びかけている。

なおこの五年は前年の訓練・教育の重要性ということをうけてソーシヤル・ワーカー訓練委員会が設置、その検討がなされ、グラハム・テイラー (Graham Taylor) によってその報告がなされている。博愛事業の発展において、その力を高めるためのトレー

ニングは当然の課題となるが、この会の『議事録』は慈善矯正の理論と実践について、こよなき一つのテキスト・ブックとしての役割を果たしていることなれば、学校の状況については、イギリスにおけるそれも含めてリポートし、かかる訓練をうけた人には恒久的な雇用と生活するにたる給料 (living salary) の道が開かれることが正当なプロフェッションへの道であると結んでいる。この訓練・教育の問題は常にこの会議の一つの重要課題となったが、一九一一年がくるまでこれを割愛する。それにかえて次に、年代的な順序からして一九〇九年の一つの重要な出来事ここに挿入することにする。

4

一九〇九年の件とは雑誌『チャリティーズ・アンド・ザ・コモングズ』(Charities and the Commons) が『ザ・サーヴェイ』(The Survey) と改題されたことである。事業の発展、プロフェッションの成立のためには、ワーカーの能力の向上発展、訓練・教育、研修の手だての整備充実を不可欠とする。研究が盛んに行なわれその成果が分有されなければならない。アモス・ウォーナー (Amos Warner) は一八九四年大著『アメリカン・チャリティーズ』(American Charities) を著し、一八九八年創設のニューヨーク・サマー・スクールではテキストとして利用されていた。また先のテイラーの言にあるように『會議議事録』も一つのテキスト・ブックであり得るとされていた。しかし出版物としては、定期刊行専門雜誌

の存在こそより重要といえるかもしれない。

もっとも初期の雑誌は一八八〇年ポストンで発刊されたレンド・ア・ハンド (*Lend-a-Hand*) でポストンとその周辺にとどまるもので、一八九七年まで続いた。一八九一年、ニューヨーク市COSは、その支持者のために『チャリティーズ・レビュー』(*Charities Review*) を発刊、のちこれとは別に、支持者を超えてその普及をはかるために一八九七年『チャリティーズ』(*Charities*) を発刊する。一方、その前年一八九六年にセツルメント、シカゴ・コモンズが『ザ・コモンズ』(*The Commons*) を発刊した。

一九〇一年COSの発刊物は『チャリティーズ』にまことめられ、一九〇五年にはセツルメントの雑誌『ザ・コモンズ』と合体され『チャリティーズ・アンド・ザ・コモンズ』となり、ソシヤルワーカー全国誌としての地位を確定する。これが一九〇九年四月より、『ザ・サーヴェイ』と改題されたのである。『ザ・サーヴェイ』は約八〇ページからなり、編集者による「ソシヤル・フォースズ」(*Social Forces*) から始まり、次に執筆者名なしの「ザ・コモン・ウェルフェア」(*The Common Welfare*) (倉福祉に関する最新の出來事、全体的記述等) が続き、いろいろなテーマによる論文が並ぶスタイルをとっている。ちなみにこの新号の巻頭論文はジェーン・アダムス (*Jane Addams*) の「道德的インストラクションの社会改良に及ぼす影響」(*The Reaction of the Moral Instruction upon Social Reform*) であった。

慈善の終焉またはソーシヤル・ワーカーの育ちゆく頃

この雑誌の出版責任者は、チャリティー・パブリケーション委員会、スタッフ、デパートメンタル・エディターの三グループからなっている。委員長はロバート・デューオリスト (*Robert DeForest*) でジェーン・アダムス、ジェコブ・リース (*Jacob Riis*)、グラハム・テイラー、エドワード・デイヴァイン (*Edward Devine*)、その他十数名が名を連ね、スタッフはデイヴァインを筆頭にポール・ケロッグ (*Pall Kellogg*) など合計九名、さらに部門エディターは、ジョン・コモンズ (*John Commons*)、ホーマー・フォークス (*Homer Folks*)、フローレンス・ケリー (*Florence Kelley*)、フランシス・マクリン (*Francis McLean*)、その他合計一〇名となっている。まことに大世帯ということであるが、その錚々たる顔ぶれば、当時のアメリカ・ソーシヤルワーカーを代表する観がある。このことは、この雑誌が唯一の、しかもかくも權威あるソーシヤル・ワーカーの全国誌であったということを示すものである。

ゆえに旧名とくに「チャリティーズ」を捨てて新名にかえるということは大問題であったはずである。『ザ・サーヴェイ』が選ばれた経過については何も知らない。当時、すでに「ソシヤル・ワーカー」「ソシヤル・ウェルフェア」「ソシヤル・サーヴェイ」また「ソーシヤル・リフォーム」という言葉がかなり普及していたと思われる。現在の感覚からすると「サーヴェイ」は、それによってかえるほど「ソシヤルワーカー」を表わさず、当時の事情を考えると「ソシヤル・リフォーム」の方が適切でないか

慈善の終焉またはソーシャル・ワークの育ちゆく頃

と思うのであるが……。

ところでアメリカ社会福祉発達史における二大潮流は、COS運動とセツルメント運動であるが、もう一つの潮流としてサーヴェイ・ムーヴメントを含め、三大潮流とすることもできる。処理すべき問題を生みだす社会諸条件の科学的究明による事実の究明——サーヴェイこそ、この時代のソーシャル・ワークの最重要課題であった。一九〇〇年の初め十年はサーヴェイ・ムーヴメントの時代と特徴づけることができ、「サーヴェイが輝く新しい星として、われわれの地平に現れた時代」であった。一九〇七年からは、当時アメリカを代表する工業都市ピッツバーグで調査が開始される。それは全アメリカの、とりわけ全ソーシャルワーカーの最も注目を集める大イベントであった。調査責任者はデイヴァイン編集長の下で『チャリティーズ・アンド・ザ・コモنز』の副編集長として働くポール・ケロッグであった。ピッツバーグ・サーヴェイの結果は、『チャリティーズ・アンド・ザ・コモنز』に逐次発表されていった（この調査は、のち六冊に分かれて出版され一九一四年に完成された）。『ザ・サーヴェイ』への改題は、この調査の影響であろう。逆にこの改題そのものは、当時のソーシャルワークをサーヴェイとして抱括してよいほどサーヴェイがソーシャルワークを圧倒する、すなわちソーシャルワークのサーヴェイ時代であったことを証明するものでもある。いづれにしてもチャリティーによって当時のソーシャルワークを表わすことはできず、過去のものとして捨てざるを得なかったということ

である。しかし『ザ・サーヴェイ』の新号のエディターによる「ソーシャル・フォーシズ」にはこの改題について何のコメントもない。ただ「ザ・コモン・ウエルフェア」の第一ページに小さなコラムがあり次のように記述されているのみである。

「この出版物チャリティーズ・アンド・ザ・コモنزはザ・サーヴェイにその名を新たに(rechristen)される。これまでの名称は、友人の顔のように親まれ歓迎されていたが、新しい読者にはこれが妨げ(stumbling-block)となつてゐることがわかつた。雑誌の一つの重要な目的は、社会発展のニュースを広く知らせ、コモン・ウエルフェアのために働くワーカーを新たに獲得することにある。それゆゑこの改題は賢明であると考へる。われわれの読者は、より拡大されていくソーシャル・サーピスのためのこの好機を最大に活用され、われわれに協力下さるようお願いする次第である。」

なお、次号には「ザ・コモン・ウエルフェア」の中に「ザ・サーヴェイの友」という欄で読者の状況と読者の声が紹介されている。それによると、『チャリティーズ・アンド・ザ・コモنز』(週刊である)の最終号(一九〇九年三月二七日号)の読者は一〇九〇二(うち海外四五三)で、半年前一九〇八年一月一日号が九一三五であり一七六七の増をみている。これによって当時一程度度の出版であることがわかるが、新名についての読者の声はどうであるうか。十件足らずがそのまま載せられているが、「チャリティーズは誤った観念をあたえ、いつも言訳をしなければな

らなかつた。名称の変更を心からよるこんでいる」とか「サイエ  
ンティフィック・チャリティーの機能の前進を示すもの」とか「旧  
名は不適切でぶざま (awkward) であったが……」とか「賢明な  
措置であつた」「勇気をたたえる」とかすべて好意的な意見であ  
る。編集者自身は、先週の新名第一号は、「これまで通りで読者  
は安心されたことであらう」と付記している。チャリティーはそ  
の時期、もはや新しい時代には合わなくなつてしまつていたので  
ある。

5

一九一一年全国慈善矯正会議はソーシャル・ワーカーの確保と  
トレーニングに関する委員会を設け、訓練教育の問題を大きくと  
りあげている。委員長はもとグラハム・テイラーのはずであつた  
が事情でシカゴ・スクール・オブ・シヴィクス・アンド・フィラ  
ンソロピイのソフォニスバ・ブレッキンリッジ (Sophonisba Br-  
eckinridge) になつたが、ニューヨーク、シカゴ、ボストン、セ  
ントルイスの各学校の状況を詳しく述べ、有能な人を見つけ訓練  
することが重要課題であるとしている。この部会で六人の発表  
者が登場するが、ジェーン・アダムスとメアリー・リッチモンド  
(Mary Richmond) が相並んで登場しているのは興味深い。ジェ  
ーン・アダムスは「ソーシャル・フィールドの誘い (The Call of  
the Social Field) と題し、ヒューマニスティックな、情熱に燃え  
る若者や、荒野 (wild) にも似た現代都市の社会状況を科学的に

究明し、かつ活動する無限の分野があると訴え、つづいて、訓練  
学校の必要を早くから訴えていたメアリー・リッチモンドは、の  
ちにあの『社会診断』として花開く、「ソーシャル・ワークにお  
ける最初の技術について」を発表している。

しかしここでより興味のあることは、委員長ブレッキンリッジ  
の報告の中に、ある有名大学の有力教授によるとして紹介されて  
いる関係者以外の人びとのソーシャル・ワークというものにつ  
いての見解である。それはソーシャル・ワーカーとかソーシャ  
ル・ワークというタームに大いに疑問を感じるということであつ  
た。ふつうソーシャル・ワークといわれているもの (commonly  
called social work) は有用な職業であるのか。それらは俗に  
ソーシャル・サービスといわれている雑多なもので、はつきり  
と特殊・専門化された一つのワークであるということができな  
い。ゆえにこれから社会に出ようとする能力ある学生に対して、  
責任ある教授として一つの見込みある仕事としてすすめるわけに  
はいかないというのである。もちろん、ブレッキンリッジは、わ  
れわれのワークは多様な分野で展開されているが、特定のニーズ  
をもつ人びとに提供されるサービスであり、これをソーシャル・  
ワークと総括することができ、他と明らかに区分される特殊性・  
専門性をもち得るものであると反論してはいる。しかしこのこと  
は、関係者以外にはソーシャル・ワークはまだまだ定かなもので  
なかつたことを物語っている。

慈善の終焉またはソーシャル・ワークの育ちゆく頃

ソーシャルワークの成立史において、一九一五年は、もっとも重要な年の一つである。この会議において、ソーシャルワークは果たしてプロフェッションかということが正面切つて問われたからである。これは「ソーシャル・ワークのための教育」部会で行なわれたことであるが、そこでの七つの発表の中のアブラハム・フレックスナー (Abraham Flexner) の所論はソーシャルワーカーたちに大打撃をあたえた。

彼のあまりにも有名な「ソーシャル・ワークはプロフェッションか」については多く述べる必要はない。ただ彼は六つの基準を示し、ソーシャル・ワークについて考えると、その基準のすべてについて不十分で、とりわけ教育的に伝達可能な技術をもっていないことで、ソーシャル・ワークはプロフェッションといえないとしたことだけを述べておく。続くフェリックス・フランクファーター (Felix Frankfurter) がこれに追い討ちをかけた。フレックスマナーは医学教育の改善に大きな役割を果たした、その道のチャンピオンであったが、フランクファーターはハーバード大学法学部の教授であった。彼は「ソーシャル・ワークとプロフェSSIONナル・トレーニング」と題し、法律は八〇〇年の歴史をもったプロフェッションであり、近時のこの領域で成し遂げてきた教育訓練と比べれば、ソーシャル・ワークは全くいまだしであるとす。ソーシャル・ワークは単なる個別ケースの処理ではないとい

うまでには発達しているが、社会学もまだ初期の段階にあり、学校も設置されプロフェSSIONナル・スクールといわれているものの、医療や法律の分野に比べると未発達不十分である。要するにプロフェSSIONとプロフェSSIONナル教育の確立は長い歴史を要するもので、ソーシャル・ワークの場合それがやっと一〇年を越えたばかりで、これからであり鋭意その努力を要する、とした。

デイヴァインは、ここで、プロフェSSIONナル基準を達成するために、機関における徒弟見習の訓練ではなく、学校における教育が不可欠とし、エディス・アポットは学校における実習教育の重要性について語っている。ポーター・リー (Porter R. Lee) は、委員会リポートとして、「ソーシャル・ワークのプロフェSSIONナル基礎」と題し次のように報告している。

その要旨は、ソーシャル・ワークは人間福祉にかかわるワークであり、科学的知識に基づく組織的活動であり、ソーシャル・ワーカーは問題の診断・処理のテクニカル・スキルとともに、ソーシャル・インヴェステイゲーターの能力を要する。プロフェSSIONナル基準とはその習熟性 (expertise) にあり、ソーシャル・ワークがオキュペイションからプロフェSSIONに成長するには、それに関する科学的知識の発達と、それをいかに現実に適用するか、その能力の発達によるとする。

問題の一九一七年は間近かである。この一五年、このテーマにかかわる直接の動きが遂にでてくる。この期の会議のビジネス会議 (Business Meeting) で会名変更委員会 (The Committee on



(Change of Name) が用意され、一九一六年会議までにその見解がまとめられることが決められたのである。このことはすでに以前より従来の会議の名称が不適切であるとする声が多々あがって来たことを意味するであろう。

たとえはこの一九一五年会議においても、かつてこの会議（一九一六年）で初めて「セツルメント」についてアピールしたジュリア・ラスロップは一九一二年創設の連邦児童局の局長になっていたが、児童部会において次のような発言をしている。彼女は二つのなすべきことがあるが第一になすべきことは、この会議の名称を変えることとした。セツルメントの一員としていうと、セツルメントは人びとの直面する社会的・産業的諸問題にひたすら取り組む、社会的正義の追求を通じて社会を改良すべきという信念をもって、チャリティーズ・アンド・コレクションといううんざりさせられる問題 (disheartening problems) とは別の局面に展開されてきた。われわれは旧名にあきあきし、新しい名称を望んでいないであろうか。矯正にしても今や予防とガイダンスの時代ではないか……と。セツルメントの人たちは初めから「慈善矯正会議」には異和感を抱いていたに違いない。われわれにもよく理解できることである。

一九一六年会議ではグラハム・テイラーを委員長とする全国会議名称変更委員会 (the Committee of the National Conference on Change of Name) は全会一致で次の諸事項を決め、ビジネス・ミーティングに提出した。

慈善の終焉またはソーシヤル・ワークの育ちゆく頃

1 会議の名称を変えることが望ましいこと

2 次年度もこの委員会を継続すること

3 候補にのぼっている新名を記載し、オリジナルな新名を記入できるワクも含めた投票用紙を作成し郵送調査 (Postal canvass) でこれを行なう。

4 この結果を分析し、新名変更の全過程を発表する。

5 従来の名称と新名について最終投票を行ない決定する

6 会議によって任命された実行委員会がこれを行なう

## 7

いよいよ一九一七年である。全国慈善矯正会議としてピッツバーグに招集されたこの会議は、ソーシヤル・ワーク会議とその名を改めることが決定され、この会議からその新名によってこれを呼ぶことになった。ここではこの名称変更を重要課題として展開してきたが、ある意味では呼び名が変わるだけのこのことは、革命の変革を起こしたわけでもなく、それだけのことも受けとめられよう。ましては部外者にとっては大して意味はなく、それが社会にあたえた影響というものは大してなかったことであろう。

一九一七年といえば、世界の大事件としては三月のロシア革命がある。この遙か彼方の出来事は、この時期、アメリカにとって脅威といえるものではなかった。ロシアがこれによってウォッカを禁止したことを政治革命以上に意義ある社会革命と評価する禁酒主義ソーシヤル・ワーカーの数々の声が『ザ・サーヴェイ』にで

# PITTSBURGH! THE NATIONAL CONFERENCE! YOU!

If you are in any way concerned with the work of social betterment, institutional or otherwise, the question of attending the 1917 National Conference of Charities and Correction at Pittsburgh June 6-13 is vital to you.

The best of social work in America will be represented there.

Special effort will be put forth to make your time count for the most.

Scan the list of chairmen: Bowen, Copp, Gillette, Osborne, Persons, Reynolds, Senior, Winslow, Woods.

Write for program, to be published in February Bulletin.

*SPECIAL RAILROAD RATES!*

315 Plymouth Court

Chicago, Ill.

『ザ・サーヴェイ』1917年2月3日号より

ている。アメリカにとって何よりも大事件は、いうまでもなく第一次世界大戦への参戦である。すでに一九一四年から始まっていたこの戦争にアメリカはずっと参戦を思いとどまっていた。しかし遂にこの四月初め、参戦にふみきることになる。四月一日号の『ザ・サーヴェイ』は、下院三七三対五〇、上院八二対六で、アメリカは先週ドイツに宣戦布告したと報じている。この会議は、それから二ヶ月後であり、戦争という非常事態に大きな衝撃をうけたソーシャル・ワーカーたちの初めての全国集会となるわけであるから、戦争が最大の話題となり、この戦時下においてソーシャル・ワークがどうあるべきかが話し合われた。しかし、会議名変更について、すでに前年手続きは決定され、この一七年会議は、いよいよ結着をつけるべき時として、会員にとっては重要な年であった。

新しい名称の候補は、「ソーシャル・ワーカーズ」「ソーシャル・ウェルフェア」「パブリック・ウェルフェア」「ソーシャル・サービス」そして考えつく「他の名称」とするか、それとも旧名のまま「慈善矯正」とするか、どれを選ぶかである。この意向調査は投票の形で行なわれ表1の結果を得た。

説明はなされていないが、この表からみると、第一選択、第二選択の記入を求め、第一は二ポイント、第二は一ポイントと得点化され、第一選択のみとした場合は三ポイントがあたえられている。「ソーシャル・ワーカーズ」を選んだ人は、そのみとする人が六四人、第一選択が五一人で一一五名、第二選択は二九人

表1 CHANGE OF NAME

Name	Preference	Votes	Points	Total
National Conf. of C. & C.	First	32	64	...
	Second	24	24	
	Only*	27	81	
National Conf. of Social Workers	First	51	102	169
	Second	29	29	
	Only*	64	192	
National Conf. on Social Welfare	First	36	72	323
	Second	34	34	
	Only*	15	45	
National Conf. on Public Welfare	First	18	36	151
	Second	23	23	
	Only*	6	18	
National Conf. on Social Service	First	14	28	77
	Second	41	41	
	Only*	10	30	
				99
Number of marked ballots				819
Number of blank ballots				273
				11
Total number of ballots cast.				284

1917年全国ソーシャル・ワーク会議議事録653ページより。

慈善の終焉またはソーシャル・ワークの育ちゆく頃

合計一四四人、総数二八四人の半分を越え、白票一一を除くと差はさらに大きくなる。なお旧名のままとする人も「第一」「唯一」選択で五九人もあり、ポイントとしても第二位であったことが注目される。いずれにしても「ソーシャル・ワーカーズ」が三二三ポイントを得て他を大きく引き離し栄冠を克ちえたのである。しかし修正案がでて「ソーシャル・ワーカーズ」でなく「ソーシャル・ワーク」となり「ソーシャル・ワーク」とすれば「オン・ソーシャル・ワーク」ではないかということもあったが、最終的に「オブ」となり「全国ソーシャル・ワーク会議」(The National Conference of Social Work)と決定されたのである。

この会議中、会議名変更にかんする話題として、次のようなことがあったという。それはマサチューセッツ州のある州慈善委員の発言に含まれていたものであるが、それは矯正関係者のいうところ、すなわち刑務所管理や非行少年のケアにあたっているわれわれは、自分たちをソーシャル・ワーカーとは思っていない。それゆえにこれまでの「矯正」がなくなり、会議名が「ソーシャル・ワーク」となってしまうと、この会議に参加できなくなってしまうのではないかと心配しているというのである。これに対してこの委員は、ソーシャル・ワークとは個人およびグループについて行動改善 (building up good habit) をうちたてて人びとの生活の改良を目指すもので、矯正の仕事はソーシャル・ワークといわずして何がソーシャル・ワークかとアピールしている。これからみると、矯正はチャリティーズでないがゆえに、慈善に並んで矯正

慈善の終焉またはソーシャル・ワークの育ちゆく頃

で両者は区分されていたといえ、ここに来て、ソーシャル・ワークという一つの名の下に抱撰されたといえる。

もう一つは、「全国ソーシャル・ワーク会議」として初めて召集される翌一九一八年会議の会長として選ばれたロバート・ウッズ (Robert Woods) のアドレスである。彼は、今やかつては夢とも思っていたいろいろな試みも現実化される前進をかちとってきたが、この会議の新名は、生活最低限度の確保、悪や苦難の防止にとどまらず、すべての人びとにとっての生活の充実発展 (fulfilling of life)こそわれわれの目的とし、われわれが第一の責務としなければならないことを意味する。このヴィジョンは、五〇年前、COSやセツルメントの創始者たちによって示された正義のための結集にはかならない。次の会議には実質的な成果をもって、これにこたえようではないか、と力強く訴えたのである。

8

会議は六月六日から一三日までであったが、『ザ・サーヴェイ』の六月一六日号は編集長ポール・ケロッグ (一九一二年よりデヴァインの後を継いで編集長になった) は、その巻頭論文として「全国ソーシャル・ワーク会議」という見出しで、会議全体の模様と新名への変更の経過について報告している。最大の問題はやはり戦争であって、戦時下におけるソーシャル・ワークの問題がどのセッションにおいても熱心に討議された。ケロッグのそれらの総括としては、それによってこれまでのソーシャル・ワー

## SOCIAL DIAGNOSIS

By MARY E. RICHMOND

For six years Miss Richmond has been studying and gathering material for this book. It represents not only the product of her long and varied experience in charity organization work but also the best thought and practice in every form of case work. It is an exposition of the technique of social work with families and individuals. The case method is largely used, 458 case illustrations and citations from the experience of social practitioners being included in its pages.

Written primarily for persons who intend to make social work a profession, this textbook will also be indispensable to students of social conditions—teachers, judges, doctors, employment managers, clergymen, and all others who must make decisions affecting the welfare of individuals.

Cloth; large octavo; 511 pp. Price, \$2.00 net; postpaid, \$2.10.

Order from PUBLICATION DEPARTMENT, RUSSELL SAGE FOUNDATION - - 130 East 22 Street, New York City

『サーヴェイ』1917年5月5日号に掲載された広告

クが変わってしまうのでなく、それが取組む問題が兵士を送りだした家族等その他新しい問題の出現によって、より拡大されより深刻化するものと受けとめられたとのことである。会名変更については、この会議は四十年前の発足以来、常に冷静に課題に取り組み、新しい状況に応じる若き弾力性 (elasticity of youth) を保持してきたのであり、会名変更はその証しであるとし、「ソーシャル・ワーク」を、その新時代を表わすものと評している。

かくして全国慈善矯正会議として招集されたこの会議はこの一九一七年から「全国ソーシャル・ワーク会議」に改称され、その議事録も『ソーシャル・ワーク会議事録』として出版された。この一九一七年会議の名称変更と優るとも劣らずソーシャル・ワークにとって重要なもう一つのことがあった。それはいわずと知れたリッチモンドの『社会診断』*Social Diagnosis* の発刊である。この一七年会議においてもリッチモンドは「ソーシャル・ケース・ワーカーの責務」と題する発表において、それを「個人的診断」と批判する人びとに「社会」診断であることの真意を展開している。とにかくソーシャル・ワーカーは、「ソーシャル・ワーク」の名を天下にうちたて、そしてこの『社会診断』によって、それが一つのプロフェッションになる大きな手がかりをこの一九一七年に得たのである。

9

以上、チャリティーからソーシャル・ワークへの変遷をたずね

慈善の終焉またはソーシャル・ワークの育ちゆく頃

てみたが、ここにタイムとして整理したおこう。「慈善」「博愛」「ソーシャル・ウエルフェア」「ソーシャル・サービス」「ソーシャル・ワーク」についてである。

慈善 *charity* という語はギリシャ語、カリタス *caritas* すなわち愛 *love* (兄弟愛) からきているもので、他に対する愛に基づく行為であり、これを肉親を超えて他の人びとに及ぼすことである。すなわち他の人びとを愛し、ゆえに与え、相手のためにすること (*giving and doing*) となる。

ゆとりのある人びとは貧しく困苦にある人びとを助けた。一九世紀、慈善は多くの人びとの行為となり、さまざまな慈善団体が登場し隆盛をきわめた。しかし困っている人を助けるという、そのものとしてはうるわしいこの行為は批判されるべき問題を含んでいた。

フリードリッヒ・エンゲルスは慈善というものは、相手に慈悲を乞われ、それに依存させることによって、人間としての尊厳を喪失させ、人間社会から排除し、一方与え手はそれによって自分を類い稀な慈悲心をもつ善人と誤って自負させ、世間の評判などに自己を失わせることによって、受け手以上に墮落し非人間化されていると痛烈に批判する。慈善そのものでなく、慈善のあり方が問題であるが、慈善行為には、そうした要素を含みがちであったことから、慈善そのものがかかるものとされてしまったのであろう。

このことに関して、アメリカではないが、慈善についての第一

慈善の終焉またはソーシャル・ワークの育ちゆく頃

人者、ロンドンCOSのチャールズ・ロック (Charles Locke) のいうところを聞かなければならない。彼は、「われわれが喜捨金のしるしとして誇っている、龐大な寄付芳名録は、われわれの無関心の記念碑に過ぎないではないか」とか、「慈善は生きているバイ菌のようなものだ。次ぎから次ぎへと他人に伝染していく。そして偽善者への寄付金となって皮肉屋の悪ふざけの材料になるばかりではないか」といつつ、「慈善は社会を刷新するものである……われわれはチャリティーを自助の精神力を創造するように使わなければならない」とした。要するに誤まった慈善であったはず、正しい、まことの慈善でなければならないのであり、ゆえにその限りにおいて「慈善の一語は一ダースのソーシャル・ウエルフェアにも換えたくない」とするのである。

COSの創設と展開は、慈善を単なる施与でなく、受け手の問題解決と生活上を課題とした。問題を見究め正しく実情を把握し最良の方向に援助を行なう。慈善は単なる施与でなく、ゆえに科学であり、科学的慈善 (scientific charity) である。科学的慈善がソーシャル・ワークとなつたともされ、また慈善——博愛——ソーシャル・ワークとつなぐ見解もある。

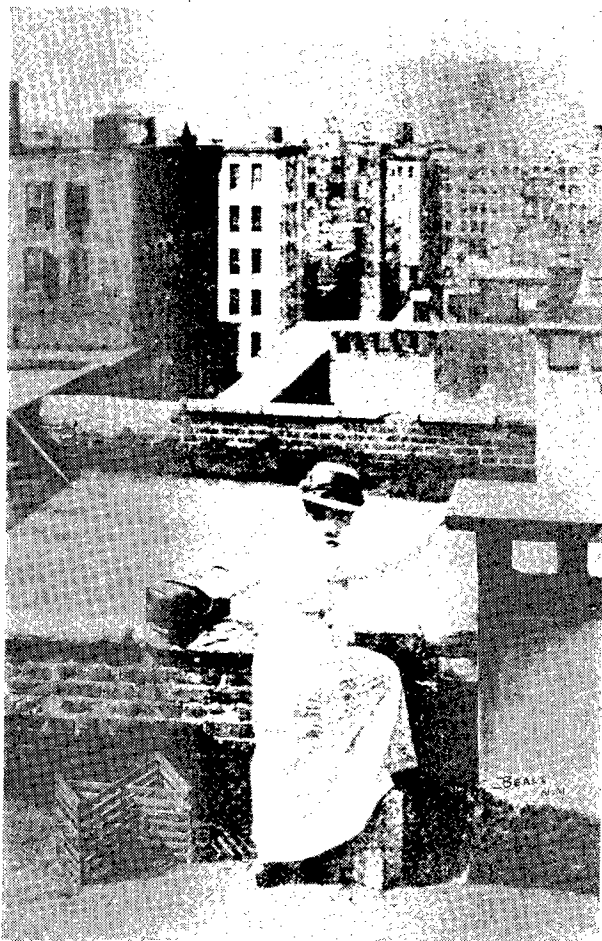
博愛 (philanthropy) もチャリティーと同じくギリシア語からきており、フィロPythoは愛loveを意味し、アシロpro anthroposは人類Mankindであり人類・人間愛ということである。このフィランソロピーとチャリティーとはマクミラン社の『社会科学エンスaikトコペディア』(Encyclopedia of Social Sciences)の指摘に

あるように同義語的に使われているといえるが、敢えていえばチャリティーが与え手に強調点に置かれておるのに対して、与え相手すなわち受け手を重視するもののように思える。チャリティーという語そのものにはエンゲルスが述べた大いに問題を含む、否定的イメージがぬぐい難い。前記『エンスaikトコペディア』では初版(一九三〇年)では「チャリティー」の項目があったが次版(一九三三年)ではチャリティーを全くなくしフィランソロピーにかえてしまっている。そしてその理由は「チャリティーは今日では何か品位を損なう (degradatory) 含蓄を有し、またそれゆえに、より受け容れられやすい (acceptable) 概念であるフィランソロピーに次第に道を譲ることになつたとし、オックスフォード・イングリッシュ・ディクショナリーのフィランソロピーの定義「彼の同胞の幸福と福祉 (well-being) を促進する意向または実行 (disposition or active effort)」を紹介し論述をすすめている。また、ナタン・E・コーヘン (Nathan E. Cohen) は、慈善は、予防と福祉増進に強調点をおくフィランソロピーにその道を譲つたとしている。

ニューヨークCOSによるアメリカ最初の学校はチャリティーでなくスクール・オブ・フィランソロピーであったし、シカゴでもスクール・オブ・シヴィック・アンド・フィランソロピーであり、また一九〇四創立のボストンの学校は初めからスクール・オブ・ソーシャル・ワークであった。すでにセツルメント活動も大きな部分をしめており、その他さまざまな分野に展開するその諸活動を、チャリティーでは包括できなかったのであろう。

一九一七年「ソーシヤル・ワーク」に並んで「ソーシヤル・ウエルフェア」「パブリック・ウエルフェア」と「ソーシヤル・サービス」があった。当時、ソーシヤル・ウエルフェアは機関やプログラムに関し、ソーシヤル・ワークはかかる機関におけるオキユベーションであり、ソーシヤル・サービスはある種類の機関とあるタイプのオキユベーションを意味したとされている。しかしこ

慈善の終焉またはソーシヤル・ワークの育ちゆく頃



『ザ・サーヴェイ』1914年2月14日号607ページより

こでは、こうした区分についての論議は必要ではない。とにかくチャリティーではよくなかったのである。

しかし、これによってチャリティーという名称はすべて消滅したのではない。いろいろ団体・組織名になお残ったであろうが、チャリティーでもフィランソロピーでもなく、以後はソーシヤル・ワークだということで大勢は決したのである。この一九一七年

慈善の終焉またはソーシャル・ワークの育ちゆく頃

には、二二年にアメリカ・ソーシャル・ワーカー協会になる全国ソーシャル・ワーカーズ・イクスチェンジ (National Social Workers' Exchange) が結成されている。翌一八年には、アメリカ慈善組織協会 (American Association for Organizing Charity) はそのメンバー機関に、この団体の中心的に取組む課題は何であったかを訴え、問題を有する家族 (disorganized families) に対するケース・ワーク、家族援助こそ、それであったと結論づけ、賛否を問ひ、アメリカ・ファミリー・ソーシャル・ワーク組織協会 (American Association for Organizing Family Social Work) へ改称することを決め、またこの年には、アメリカ病院ソーシャル・ワーカー協会 (American Association for Hospital Social Workers) も結成されている。次の一九年には、ニューヨーク・スクール・オブ・フィランソロピーは、スクール・オブ・ソーシャル・ワークになった。一九二〇年、ファミリー・ソーシャル・ワーク組織協会は、のちソーシャル・ケースワーク (現ファミリーズ・イン・ソサエティ) にその名を改める『ザ・ファミリー』*The Family* を、リッチモンドの巻頭論文を載せて発刊する。初期の『ザ・ファミリー』は三〇ページの小冊子であった。しかし以後、ケースワークは精神医学・心理学の大きな影響を受けて発達し、これを拠点としてプロフェッションの確立に向つて奮闘を続けていく。一方、チャリティーの座を最初に奪い取った『ザ・サーヴェイ』は、その時期の栄光を全く失墜した（社会と調査）を忘却したような時代がきて、一九五二年にその力いきま

で、そのサーヴェイの名を守り続けた。今でいうソーシャル・ワークの専門性に限定せず、広く社会の諸問題を含めたこの雑誌は、写真も沢山載せられていて、二〇世紀前半のアメリカの類いなぎ一つの記念碑になつてゐる。掲載した写真は、ニューヨークにある有名なリリアン・ワルド (Lillian Wald) のヘンリー・ストリート・セトルメントの訪問ナースが、スラム街のビルの屋上から他のビルへ家庭訪問するところ、アメリカのソーシャル・ワーク若き日のヒトコマである。遠く懐しいアメリカとそのソーシャル・ワークへの想いは、きまぬ。

参考使用文献

- (1) Elizabeth C. Meier, *A History of New York School of Social Work*, 1954.
- (2) Nathan E. Cohen, *Social Work in the American Tradition*, 1958.
- (3) Kathleen Woodroffe, *From Charity to Social Work in England and U. S.*, 1961.
- (4) Walter I. Trattner, *From Poor Law to Welfare State: A History of Social Welfare in America*, 1974.
- 古川孝順訳『アメリカ社会福祉の歴史』川島書店。一九七八年。
- (5) Sidney E. Zimbalist, *Historical Themes and Land-*



*marks in Social Welfare Research. 1977.*

- (6) James Leiby, *A History of Social Welfare and Social Work in the United States, 1978.*
  - (7) フリーゼリョム・ホニヤニス 『イギリスの社会労働者階級の状態』 (一八四五年) マルティン・ローニン主筆研究会誌。一九五五年。
  - (8) *Encyclopaedia of the Social Sciences VI, 1930, pp. 340-345.*
  - (9) *Encyclopaedia of the Social Sciences, XI-XII, 1933, pp. 72-80.*
- National Conference of Charities and Correction: Proceedings 45*
- 《1902》
  - (10) Timothy Nicholson, *A Glance at the Past, A Look at the Present, A Vision of the Immediate Future, pp. 1-11.*
  - 《1904》
  - (11) Jeffery R. Brackett, *The Worker: Purpose and Preparation, pp. 1-12.*
  - 《1905》
  - (12) Samuel G. Smith, *Social Standards, pp. 1-*
  - (13) Graham Taylor, *Report of the Committee on Training for Social Workers pp. 436-444.*

慈善の終焉またはソーシャル・ワークの首らへん

- 《1911》
- (14) Sophonisba Breckinridge, *Report of the Committee on Securing and Training Social Workers pp. 365-369.*
- (15) Jane Addams, *The Call of the Social Field, pp. 370-372.*
- (16) Mary Richmond, *The Art of Beginning in Social Work, pp. 373-379.*
- 《1915》
- (17) Abraham Flexner, *Is Social Work a Profession? pp. 576-590.*
- (18) Felix Frankfurter, *Social Work and Professional Training, pp. 591-595.*
- (19) Porter Lee, *Committee Report: The Professional Basis of Social Work, pp. 596-605.*
- (20) Edward T. Devine, *Education for Social Work pp. 606-609.*
- (21) Edith Abbott, *Field Work and the Training of the Social Worker pp. 615-621.*
- (22) Julia Lathrop, *The Service of Settlement and Neighborhood House: Discussion, pp. 201-203.*
- (23) *Minutes of Business Meetings p. 640.*
- 《1916》
- (24) *Minutes of Business Meetings pp. 685-687. 1917.*

慈善の發達またはノーションナル・ワークの育ちゆく頃

《1917》

- (5) Robert Woods, Address of president-Elect, pp. 28-29. Minutes of Business Meetings, pp. 652-653.

*The Surrey* 145

《1909》

- (9) The Common Welfare, April 3, p. 3.

- (7) The Common Welfare, April 10, pp. 92-93.

《1917》

- (8) Pail Kellogg, The National Conference of Social Work, June, 16, pp. 253-258.